

ヤコブ3章1～12節「ことばの過ち」

私たちはみな、社会の中で周りの人たちとの関わりの中で生きていて、人間関係で失敗することがあります。理解し合えなかったり、傷つけ合ったりしてしまうことがあります。そして、その原因の多くは私たちが発することばにあると思います。

1. 過ちを犯す存在（：1～5）

ヤコブはここで自分たち教師のことを取り上げます。1節。初代教会にも教師が立てられました（Ⅰコリント12:28）とあります。兄弟姉妹の信仰の成長のために、みことばを教え、信仰生活について教える働きは、主に仕える光栄ある働きです。ただし、人を教えるためには自らがまず問われますし、もし過ちを犯すなら、人々の前で目立つことになります。責任が大きく、「より厳しいさばきを受け」ることになるのです。

ですから、「多くの人が教師になってはいけません」とヤコブは忠告します。自らの思いから教師になろうとする人や、教師という立場でなくても、兄弟姉妹の間で常に教える側になろうとする人がいて、そのような人に対してヤコブは忠告したのかもしれませんが。

いずれにしてもヤコブは自らの責任の大きさを認めています。自分のことを棚に上げて兄弟たちを教えるのではなく、自らの行いについて注意を払っていたのです。

私自身がこのことを覚えていなければならぬと教えられます。また牧師だけでなく、教える側になる場合に、誰もが覚えている必要があります。もちろん、責任が大きいからといって尻込みするのではなく、教える必要がある場合には、相手のために積極的に仕えることが大事です。それが教会のため、主のためになることを願って仕えるのです。

それでも、完全な人はいませんし、私たちは過ちを犯しやすいことをわきまえていなければなりません。2節。人はみな、多くの点で過ちを犯します。その中でもことばによる過ちは、犯さない人はいないだろうと言います。「もし、ことばで過ちを犯さない人がいたら、その人は…完全な人です」との完全さは天の御国においてのみ完成されるものです。それでも、キリスト者はそのような完全を目指して、成長・成熟することを求め、祈り、努めるべきです。

そして、ことばを制御できる人はからだ全体も制御できると言います。そのことを二つの例をあげて分かりやすいイメージで教えます。一つは馬のくつわです。3節。馬の口にくつわをはめて、馬に乗る人はくつわにつながる手綱を引いて、馬を思い通りに動かすことができます。小さなくつわで大きな馬のからだ全体を制御することができます。もう一つのイメージは船の舵です。4節。大きな船が、船尾についている小さな舵によって進む方向を導かれます。舵を取る人の思い通りに船を進ませることができます。

小さなものによって大きなものを制御することができる例を挙げた上で、「同じように、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って自慢します」と言います。舌はからだの中の小さな器官ですが、舌によってことばを制御する人は、自分の存在と行動を制御することができます。けれども実際は、舌を制御できず、ことばで過ちを犯し、自分の行動を間違った方へと進ませてしまうのです。

そのことを分かりやすくするために、もう一つのイメージを語ります。それは火です。5節。ことばによる過ちは初め小さいものですが、やがて大きな問題となってしまうことがあります。まさに、小さな火が大きな森を燃やしてしまうことに似ています。自分が言った一言が多くのの人々に影響を与えてしまうことがあります。何気なく言ったことばが誰かを深く傷つけてしまうことがあります。

そして、火によって燃やされるというイメージは、さらに深刻な状況についても適切に表現します。6節。舌が語ることばによってからだ全体を汚すことがあります。単にことばだけの問題ではなく、そのことばを語る人の全体に影響を与えます。過ちを積み重ねることになったり、からだの不調をもたらしたりすることもあるでしょう。また、「人生の車輪を燃やす」ことになる場合もあります。人間関係を壊し、どのように生きていけば良いかが分からなくなることもあるでしょう。そして、罪が解決されないままであるなら、「ゲヘナの火によって焼かれ」ることになってしまいます。永遠の滅びが待っているのです。

それでも、そのようなことに気づいていないこともあったり、気づいても制御できなかったりします。また、

一度口に出してしまったら、無かったことにはできないし、破壊的な力はすぐに広がってしまいます。私たちはこのようなことばの過ちを自分や他の人のことから経験的に分かっています。

2. 罪人の現実（：7～12）

舌によって象徴されることばの問題は、ことばが出てくる人の心にある罪の現れであり、結果です。罪人は自分で自分の罪を制御することはできません。それはことばの問題で明らかです。7～8 節。

人は神のかたちとして創造され、神が創造したこの世界を神に従って管理する使命を委ねられました。それゆえに神から与えられた能力によって他の生き物を「制することができ、すでに制」しています。しかし、人は自分の舌を制することはできません。自分の罪を制することができないのです。罪があるゆえにことばによって悪を行ってしまいます。そして、「舌は…死の毒で満ちています」。それほどに罪とその結果は悲惨なものです。人は自分で自分の罪を解決することはできず、罪から解放されることはできないのです。

罪の解決はイエス・キリストにしかありません。キリストの十字架とよみがえりによるなら、罪を赦していただき、罪から解放されて生きることができます。ヤコブはその福音に基づいて語っています。

それでも神の恵みによって、信仰を与えられ、救われたキリスト者であっても、罪を犯さなくなるわけではありません。しかし、聖霊によって新しくされ、内なる人が日々新たにされる恵みを与えられています。その恵みを経験していった欲しいから、そしてきよめられることを求めて欲しいから、兄弟たちにこのような厳しい罪の現実を示しているのだと思います。

9～10 節。人にことばが与えられ、話す口と舌が与えられているのは、それを用いて神を賛美するためです。キリスト者は主であり父である神を礼拝し、賛美します。ところが、礼拝が終わって他の場面では、人の悪口を言ったり、人の態度に怒ったりして、人を呪うようなことがあるとしたら、偽善であり愚かなことです。

礼拝で主を賛美しながら、他の場面で怒りからとっさに汚いことばが出て来て、ハッとすることがあります。あるいはあまり意識していなくて失言をしてしまうことがあり、後で悔やむことがあります。心の思いをきよめられる必要があります。聖霊に満たされている必要があります。

ヤコブは同じ口から賛美と呪いが出て来ることは、神に造られた本来の状態ではないと言います。11～12 節。キリスト者は神の御業によって新しいいのちに生かされています。その本来のあり方は神を賛美することです。キリスト者の内には聖霊が住んでいてくださるので、聖霊に助けを求めるなら、どのような場面でも、人を呪うようなことばを口にしないように聖霊が助けてくださいます。不愉快にさせられるような場面でも、神の愛を思い起こし、感情的にならずに済みます。傷つけられるようなことがあっても、怒りに任せてやり返さずに済みます。聖霊に抛り頼み、満たされるなら、聖霊が助けてくださいます。そして、神に喜ばれることばを口にすることができるのです。そして、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」という御霊の実を結ばせていただけます。そのような状態こそ、神によって新しく造られた人の本来の状態なのです。

ヤコブは「私たちはみな、多くの点で過ちを犯す」と言って、自分を含めて、罪人の現実の姿を指摘します。特にことばによって過ちを犯すことの悲惨さを語り、キリスト者であっても賛美と呪いが同じ口から出て来るようなことがあることを嘆いています。

しかし、そのような罪人の現実を認めるときに、主イエス・キリストの十字架の恵みが改めて明らかになります。罪を赦していただき、新しく生かされ、聖霊の助けを受けることができるのです。そして、救われている恵みをことばや行動によって表すことができるのです。

ですから、私たちは主の御前に悔い改めて、キリストの十字架を仰ぎ、聖霊の助けを祈り求めましょう。そして、「神に喜ばれ、人々にも認められる」言動となるように祈り求めましょう。